



## 近江の古城 II 坂田郡の城跡

長浜市を含む旧坂田郡は戦国時代前半には、江南の佐々木六角氏と江北の佐々木京極氏との国境線として、また戦国時代後半には六角氏と浅井氏、あるいは織田信長と浅井氏の最前線として数多くの城郭が築かれた地域です。今回はこの坂田郡の代表的な中世城館跡を紹介していきたいと思います。

### 鎌刃城

坂田郡米原町番場に位置する鎌刃城跡は、従来土肥氏の居城として伝えられていました。土肥氏は鎌倉幕府の御家人で、承久変後箕浦庄の地頭として下向した、西遷御家人と考えられます。しかし鎌刃城跡は番場の集落から1.2kmも山中に位置しており、とても地頭領主の城跡とは考えられません。また地籍図には番場の村の中に方形で区画された「殿屋敷」という地名も伝えられており、さらにこの背後に小規模な山城跡も残存していることから、土肥氏の城館はこちらであったと考えられます。それでは鎌刃城跡はいつ頃、誰の手によって築かれたのでしょうか。

城跡の立地は、山中奥深い所で、とても在地支配の拠点として築かれた城とは考えられません。ところでこの地は彦根市武奈から番場へ越えるルート上に位置しており、中山道が封鎖された場合、湖南と湖北を結ぶ重要な街道であったようです。このことから、鎌刃城は街道を押えるために築かれた純軍事的な城であったといえます。

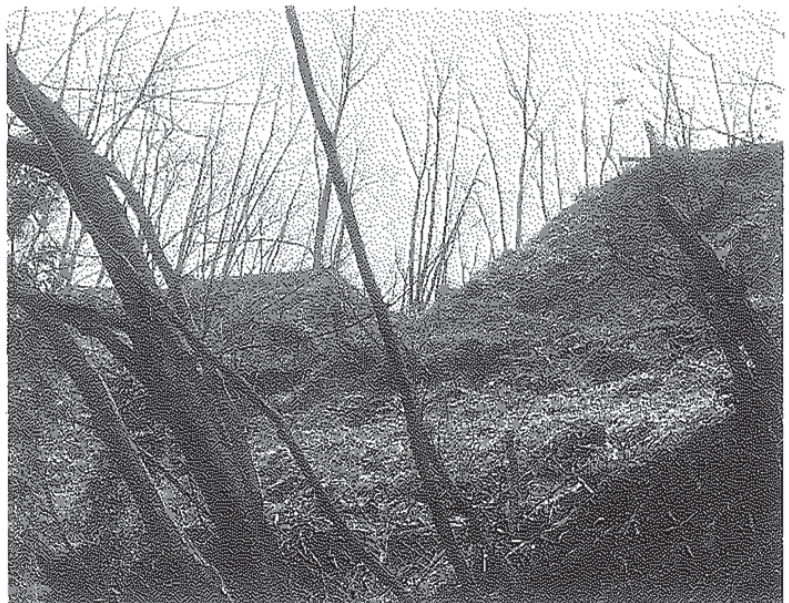
天文四年（1535）六角定頼は京極高延（高明、高広）、高政らの犬上郡

侵入に対し自ら荒神山（彦根市）に陣を敷き、兵を差し向かわせました。この合戦で今井秀信の遺児夜叉丸の一軍は、落合武奈を経て鎌刃城を攻めています。この時期、鎌刃城は堀次郎左衛門尉元積が守備していました。六角定頼は天文七年にも鎌刃城を攻めています。

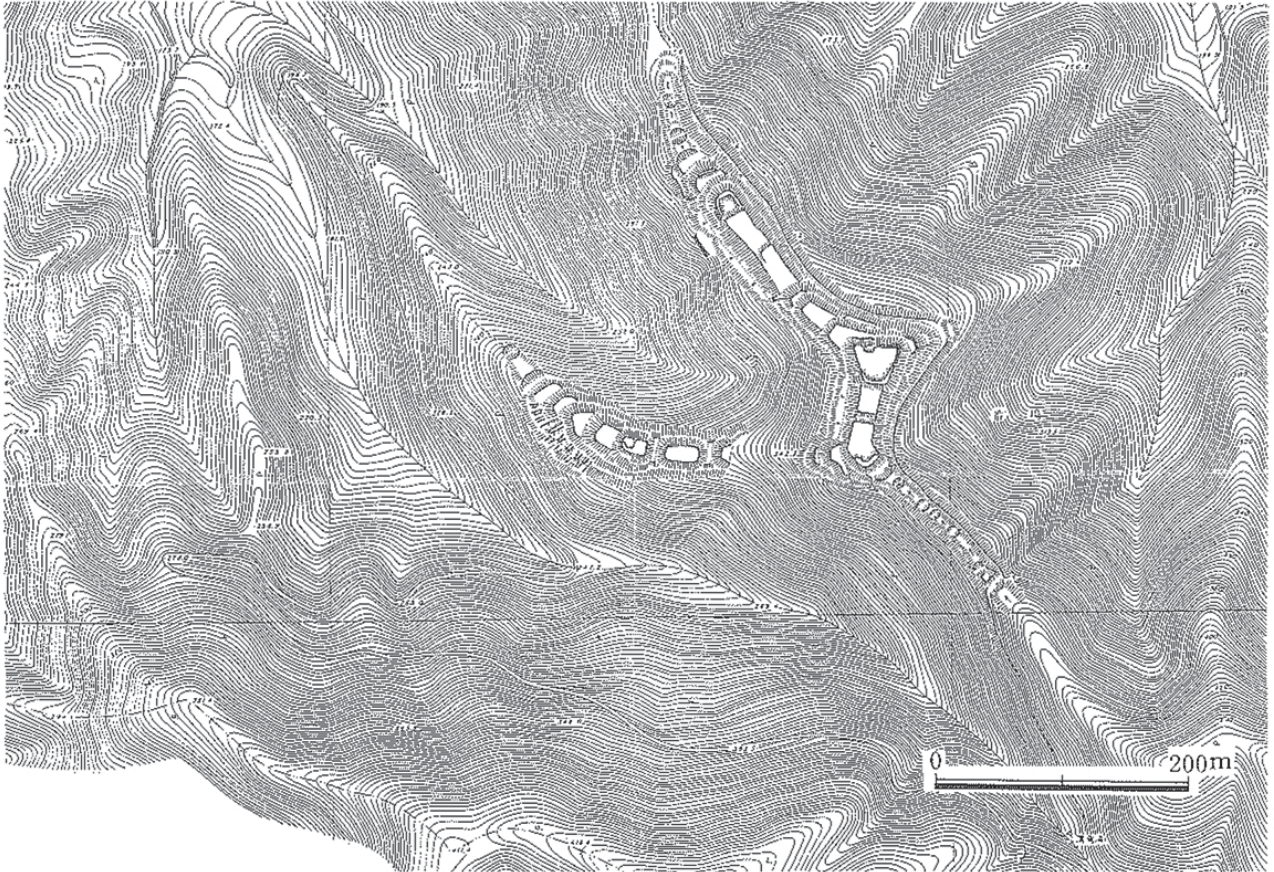
『信長公記』によると元亀二年（1571）浅井氏が鎌刃城を攻めたことにより、木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）が織田信長の命により応援にかけつけ防戦したことが記されています。おそらくこの時期、城主堀氏や樋口氏は織田氏に組していたと考えられます。その後天正二年（1574）に廃城となるまで、鎌刃城は坂田郡における織田方の城として機能していたようです。

城跡は、標高384mの山頂を中心として20以上の曲輪から構成されています。北・東・西方は深い谷となり、南方尾根続きには7本におよぶ堀切を設けています。

山頂の主郭は周囲を全て石垣によって固め



鎌刃城跡に残るみごとな堀切



鎌刃城跡概要図

ており、かつ内部には礎石が点々と残されています。

この主郭から北西および西側へ2本の尾根が派生しています。北西尾根筋には広大な6段の削平地（曲輪）があり、先端は3本の堀切で防御を固めています。さらに、曲輪に至る虎口は、石垣によって構築された見事な内枳形虎口となっています。

西側尾根には7段の曲輪を構築し、先端の緩斜面には敵状堅堀群が認められます。この敵状堅堀群は巨大な爪で山を引っかいたような施設で、敵兵の横の移動を封鎖するためのものです。県内ではまだ2～3例しか認められない貴重な遺構です。

このように、現状の遺構は戦国時代末期の特徴をよく示しており、特に石垣や敵状堅堀群の存在から、元亀～天正年間にかけての築城遺構と考えられます。その規模、構造は坂田郡内最大級の山城といえましょう。

みのうら 箕浦城（新庄城）  
しんじょう

鎌倉時代中期以降、京極氏の勢力が強まるにつれて、京極氏の被官でない土肥氏は抑えられ、延徳二年（1493）には京極政経によって、その所領は押領されてしまいます。土肥氏にかわって、箕浦庄は京極氏の有力な被官今井氏が公文として勢力を増してゆきます。この今井氏の居城が箕浦城です。

城跡は近江町大字新庄に小字“殿城”という地名が残っており、この付近が城の中心部であったと考えられていました。平成元年度、この地がほ場整備事業に伴い発掘調査されました。その結果、はたして室町時代末頃の堀や建物跡が検出され、“殿城”付近が箕浦城跡であることが実証されました。

城跡に伴う堀は2ヶ所で検出され、一方は幅5m、深さ0.8mを測り、もう一方は幅3m、深さ0.8mを測ります。これらの堀は調査区内で片端が止まっており、その間に門があったようです。この堀が城の北側堀であったと考えられ、南側に居住空間が広がっており、

掘立柱建物が2棟以上確認されたほか、炭化米や炭化した建築材が投棄された穴(土壇)、土師皿が集積された遺構や墓なども検出されています。建物の柱穴などには焼土が多く含まれており、箕浦城が火災にあったことを物語っています。遺構は調査区外にも広がっており、天野川を前面に広大な城があったようです。

このように検出された遺構は、昭和62年にほぼ全域調査された長浜市の小沢城跡とともに、中世における平野部分に築かれた館城の構造をよく示す好例といえます。

#### 上平寺城じょうへいじ(かりやす尾城)と上平寺館

中世江北の雄、京極氏の本拠地は伊吹町一帯で、太平寺城、上平寺城、柏原城などが居城として築られました。上平寺城は伊吹山の五合目付近から南へ派生する尾根上に位置しています。伊吹山に連なる尾根筋に巨大な堀切を設けて後方防御とし、堀切より南方尾根上に土塁をめぐらす曲輪を階段状に設けています。

この上平寺城から深い谷をへだてて西側にもやはり伊吹山から派生する尾根があります。ここは通称「やたかひやくぼう弥高百坊」といわれ、伊吹山四ヶ寺の一つとして、仁寿年間(851~854)三修上人によって創建され、元慶二年(878)定額寺じょうがくじとなったやたかひやくぼう弥高寺のあったところじょうです。現在尾根上には壘々と坊跡と考えられる平坦地が56ヶ所確認されています。

ところで『船田後記』という書物の中に明応四年(1495)、京極政経がやたか弥高山から出兵したことや、『今井軍記』には京極高たか清がやたか弥高寺に布陣したことが記されており、明らかに弥高寺が京極氏の城として利用されていたことがわかります。

現状を観察しても本坊跡の周囲には土塁がめぐらされ、西側斜面には豎堀も認められま



箕浦城跡で検出された堀

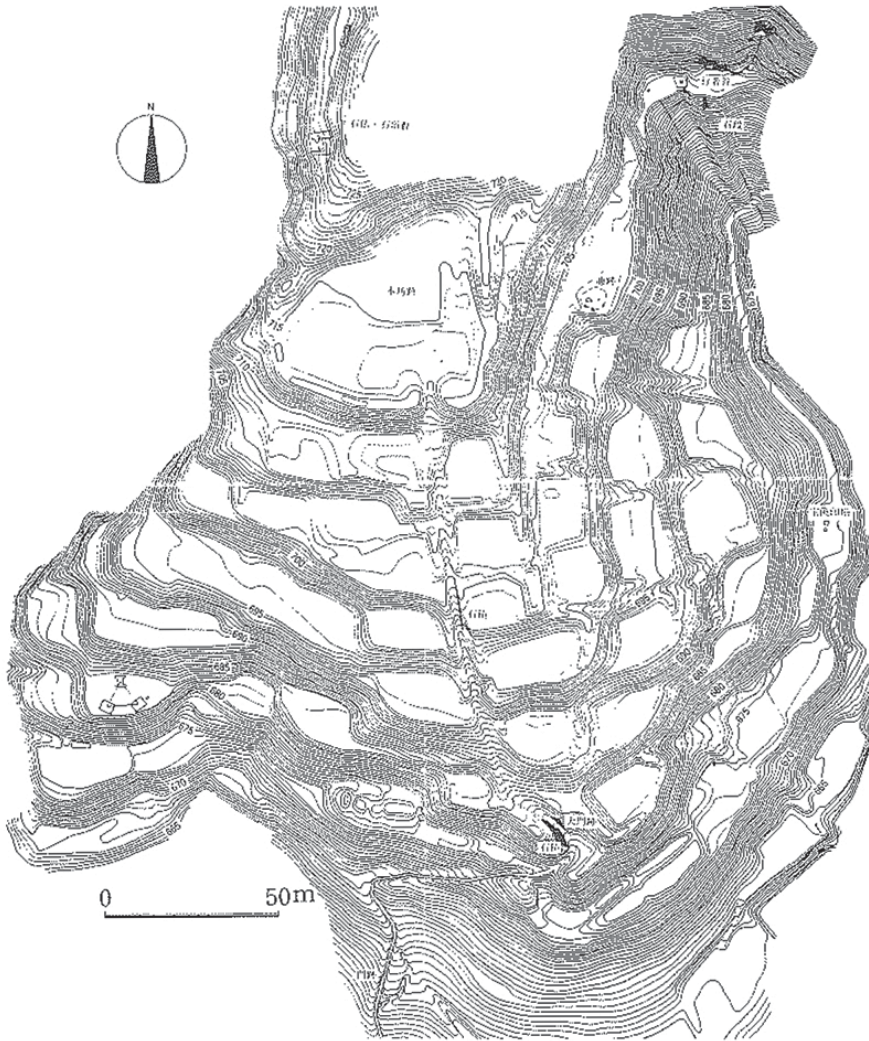
す。さらに枙形状の門跡や門跡前面にめぐらされた横堀など、明らかに寺院の坊跡ではなく、城郭遺構としか考えられないものが認められています。おそらく弥高寺が京極氏の手によって城に改修されていったのでしょう。この寺院城郭は谷をへだてた上平寺城と一対となって機能していたと考えられます。

さて、弥高寺と上平寺城にはさまれた谷の麓に上平寺館跡が位置しています。現在の伊吹神社から南に向って広大な平坦地が参道の両側に広がっています。部分的に平坦地には土塁も残されており、この付近が京極氏の屋敷(屋形)に相当するようです。さらに南方、現在の上平寺集落が京極氏の家臣達の屋敷地、町屋などのあったところじょうです。江戸時代初期に描かれた「上平寺城下町絵図」によると、それらの間は堀によって区画され、外堀のさらに外側には市とともに重臣屋敷があったようです。

このように、上平寺館は背後を上平寺城、東を藤古川(河戸川)、西を谷(要害谷)に守られ、南に北国脇往還(越前口道)が通る地に位置した京極氏の本館でした。

#### 大原氏館おおはらし

佐々木氏は信綱の子供の代に4家に分立しました。長子重綱は大原氏の、次男高信は高



弥高寺坊跡実測図（伊吹町教育委員会「弥高寺跡」1988より）



上平寺城跡より弥高寺跡を望む

島氏の、三男泰綱は六角氏の、四男氏信は京極氏のそれぞれ祖となります。このうち惣領家を継ぐのは泰綱の六角氏です。

さて大原氏の本拠地となるのが大原庄で、現在の山東町一帯です。山東町大字本市場には大原判官屋敷と伝えられる一画があります。この付近は小字にも“堀ノ西”“堀之内”“堀之南”“堀之角”“中屋敷”等の地名が残っており、広大な居館があったと推定されます。居館の中心は方形館であっあよう、現在西側がL字状に土塁と空堀を残しています。

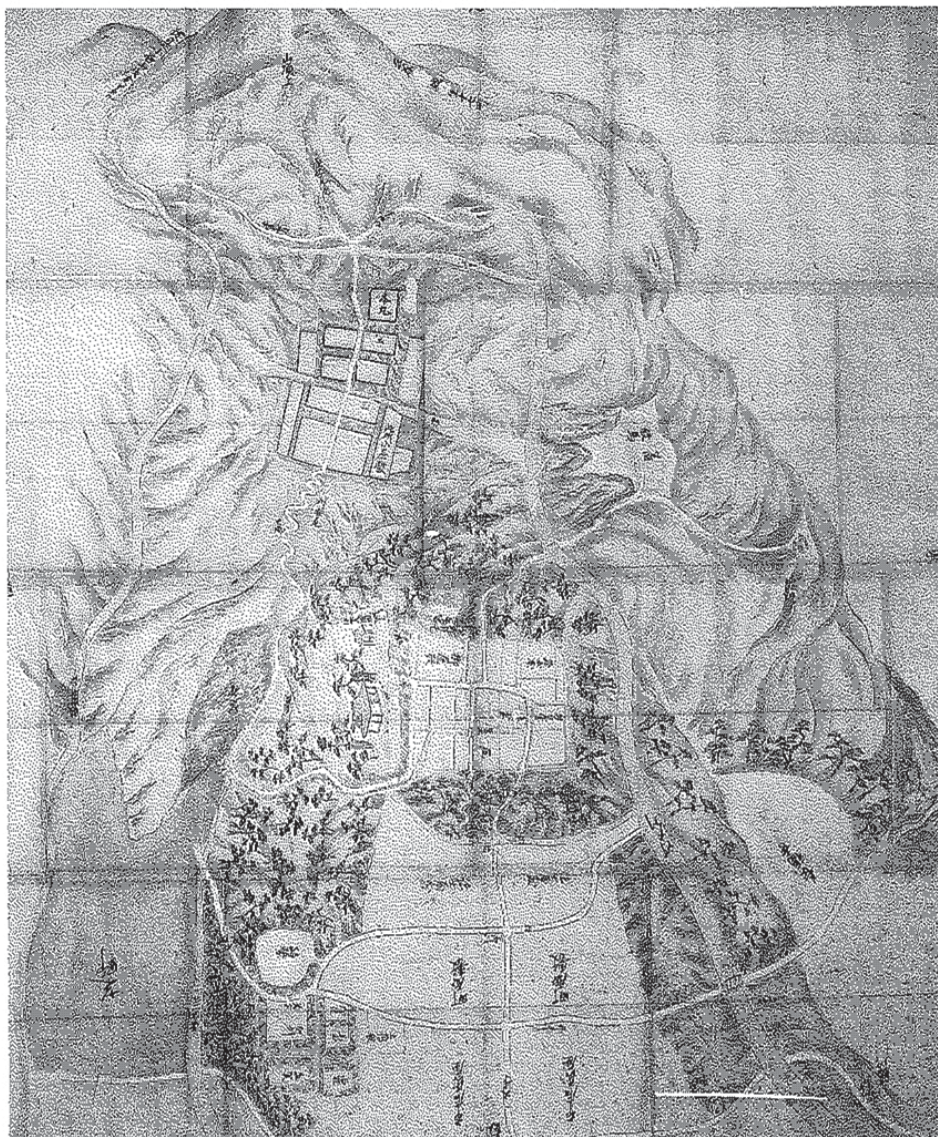
大原氏は鎌倉時代、「在京人」として幕府直属の御家人として、また室町時代は將軍の奉行衆として將軍直属の御家人でした。しかし戦国時代には六角高頼、義賢の子が大原氏を継ぎ、六角氏の被官となったようです。このように大原氏は大原庄の領主と將軍の奉行衆という二面性を有しています。本市場に残る大原館跡には大原庄の在地領主としての大原氏の姿を見ることができます。

#### よこやま 横山城

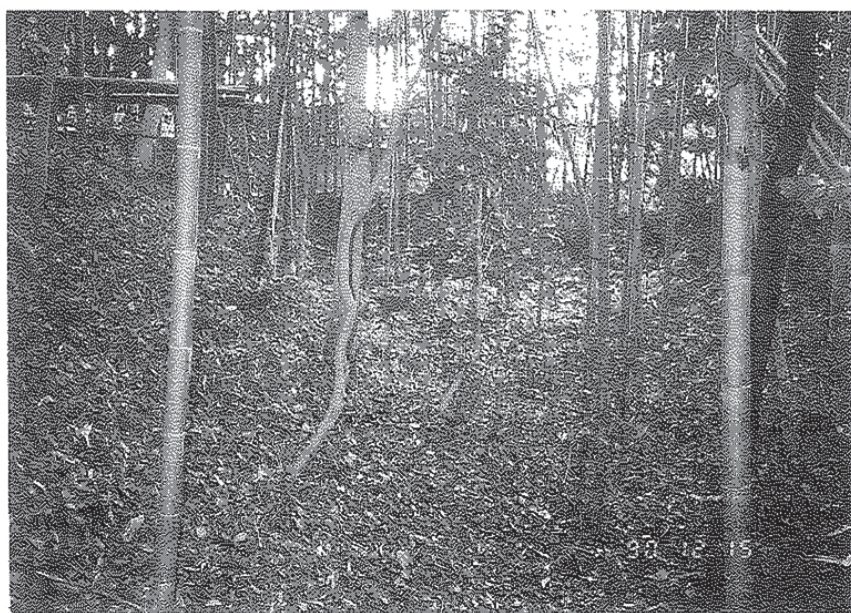
長浜市と山東町の境界、臥竜<sup>がりゅう</sup>山系の北端ピーク、標高311.8mの地に横山城跡が位置しています。この地は北国道と北国脇往還を両側に見下ろすことのできる要衝の地です。

横山城の創建は不明ですが、江戸時代に編された『諸国廃城考』には永正十四年（1517）

浅井亮政が横山城を攻めたことが記されています。おそらく江北と江南の境目の城として六角、京極両氏が争奪をくり返していたので



↑上平寺城下町絵図

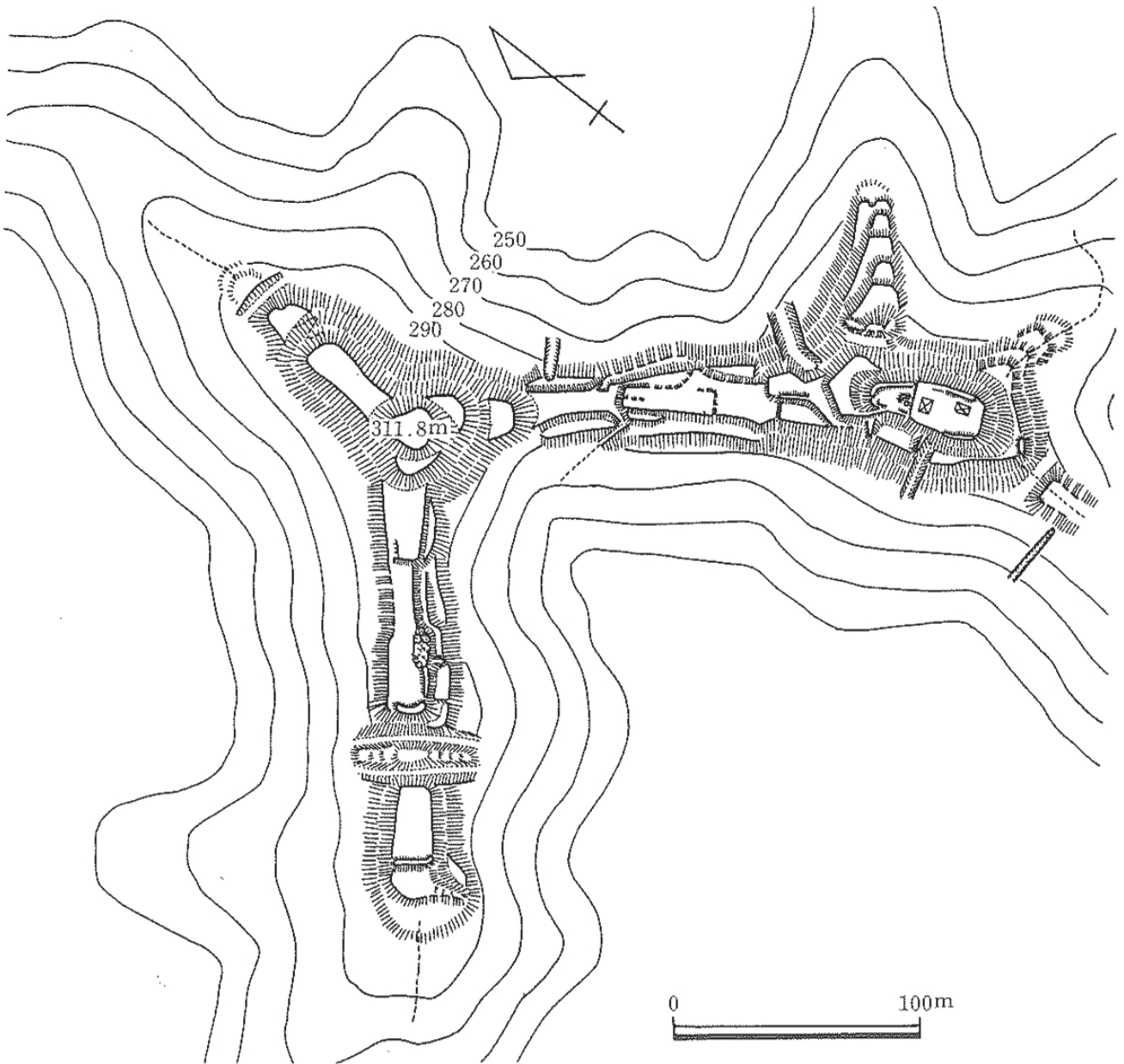


大原館跡土塁(右)と空堀(左) →

しょう。その後浅井氏の勢力拡大にともない江南進出の前線基地として、永禄四年(1561)浅井賢政(長政)によって修築されました。

元亀元年(1570)、織田信長は姉川合戦直後横山城を攻め落し、以後小谷城攻めの前線基地として、木下藤吉郎(後の豊臣秀吉)を城番に守備させました。この間『信長公記』によると、信長自身たびたび横山城へ立ち寄っていることがわかります。これに対し喉元に刃をつきつけられた浅井長政は何度も横山城を攻めますが、すべて失敗に終わっています。

城跡は横山山頂を中心にY字状に派生する尾根を加工して曲輪を設けています。それぞれの尾根先端部には堀切を掘り防御を固めています。特に西側、長浜平野に面する尾根は二重堀切が現在でも見事に残っています。山頂曲輪群は土塁も認められず、階段状に曲輪があるのみです。これに対し南側尾根の曲輪群は、直線的な土塁囲みの曲輪と竖堀が認められることから、山頂部は浅井氏時代に、南



横山城跡概要図



横山城跡の二重堀切

側尾根は元亀年間織田氏段階に築かれた城郭遺構と考えられそうです。『信長公記』によると横山城の城塀、矢倉が台風でくずれたと記されており、元亀年間の横山城には塀や櫓等の施設のあったことが知られます。現在地表面では礎石や瓦は認められないことより、簡単な井楼組の櫓や掘立柱板葺の建物だったのでしょう。

(中井 均氏 提供)